

2024年6月1日
岡部昌平

第351回山口西田読書会のプロトコル（2024年6月1日開催）

【テキスト】

第四巻「左右田博士に答ふ」の「二」第2段落、295頁の1行目「cogito ergo sum の sum を存在と考へるならば」から296頁の第4段落終わり「更にその上に直覚といふものを認めなければならぬのである」までを読了。

【キーセンテンス】

次の2カ所を選びました。

A [自覚の3段階] 我々の意識の自覚的方向は、意識一般の立場に止まるものではない。その最も深い底は私の所謂真の無の場所たる直覚的自覚にあるのであるが、その中間に於て意志的自覚を見ることができる。意志的自覚は判断的自覚よりも深く、之を内に包んだものである。(p.295 第3段落)

B [好きなどころ] 我々が意志することを知るといふから、否直観するといふことをすら知ると考へねばならぬから、理論性が最高であると云うならば、知識といふ語の意義の問題とならねばならぬ。さういふ場合の知るといふことは、意識一般によって対象を認識するといふことは違ふのである。(p.296 第4段落)

【問い】

わたしが対象を認識することは常に対象を「わたし」の外に置くことだろうか。わたしがあればこそ対象であるなら、対象こそがわたしを「わたし」たらしめているのではないか。対象認識なき自覚を区別する立場は「わたし」を喪失した危うい立場にほかならず、そこに居続けることは困難であるにちがいないと考えるがどうか。

P.293 知るといふことに、少くとも根本的に相反する二つの方向を区別せねばならぬと思ふ

対象認識の方向 vs. 自覚の方向

↑

↳限定的判断による自然界の認識 vs. 反省的判断による合目的的世界の認識